

松浦道夫学長に「贈る言葉」

副学長 自己点検・評価室長 坂手恭介

学院創立125周年，大学開学50周年の佳日に母校を去られる松浦学長のことを想い、「贈る言葉」を一言申し上げます。一口に50年と言いますが長い，長い日々であったと思います。感慨深いものがあります。

私の学生時代から数えて7番目の所属大学が桃山学院大学，という自分の経験とは全く対照的な，松浦学長の「学生・教員・退職を一つの大学で」というご経験，しかも最後は学長としてストーリーを締めくくられるのですから，その胸中は凡愚の思惟能わざるものというべきかと存じます。

私は桃山学院大学への赴任の旅程中，広報誌「アンデレクロス」をカバンから取り出してトップページの「学長挨拶」を何度も読みました。「行動する知性」という形容がぴったりの，包容力の滲みでた，笑顔の松浦学長が印象に残っています。「この学長の下で最後の仕事 教育・研究 ができる」ことに感謝しながら着任したのが，つい昨日のこのことです。

その想いとはうらはらに「新米教師」の2年間はまごつきました。幸い親切的な教・職・学に支えられ「わが愛すべき桃山学院大学」という感情が芽生え始めておりました。2月末のある日，学長から副学長として自己点検・評価の仕事をするよう突然要請されました。職務上，桃山での経験不足は問題でない，との説諭を受けてお受けすることになりました。「桃山の何が良くて何が問題かを点検する」ことが御下命の内容でした。

以来，2年間，リーダーとしての松浦学長とそのリーダーを選び出した教職員の協同の点検役が少しでも出来ればという思いで不十分ながら自己点検・評価室長の任にあたってきました。以下は，松浦学長からの諮問・御下命に

はできるだけ忠実に公正にお答えしようと記すものです。

「ぬるま湯」に喩えて、桃山学院大学が「変化の無い、のんびりした大学」と批判される局面がありますが、注意深く聞く必要があると思います。これが内部の自省から発せられる危機感の表明ならば傾聴に値します。学長を先頭に50年間、大学建設に邁進してこられたOBを含む内部の教・職・学からの声であるなら襟を正して聞くべきであると思います。

「どの方向に変わる必要があるか？」の戦略事項について、桃山は今産みの苦しみの最中ですから、もう少し時間が必要なのではないでしょうか。一旦走り出したら後戻りできないのですから。変化の時代は同時に危機の時代です。激変する環境に対応して「適者生存」がよく言われますが、結論を急ぎ「選択と集中」の道を通ることがあります。しかし、一方で「生存をつづける組織には多様性が備わっている」ことに着目し、その「必要多様性」を生存のための条件として導く知見もありません。

金太郎飴でなく、一見バラバラだけど、構成員がお互い尊敬しあって明日に向かう「オール桃山」は松浦学長の理想とも一致すると思われま

す。

「学生を大切に作る大学」が今日のトレンドですが、桃山はこれを随分前から地味に実践してきた大学だと思います。初任者研修を受けた時から思っていました、「なんでこんな面倒な手続き……」と感じる教務事項、事務事項が結構あります。しかし、これらを「学生のため」という目線で見た瞬間、その合理性、正当性が理解できることが多いです。桃山学院大学の歴史そのものだと思います。もっとも、説明不足から肝心の学生には伝わっていないことも多いですが、それは今後の課題にするとして、「学生のための大学」は桃山学院大学の立ち位置そのものとして過去50年の実践事項であったと思います。胸を張っていただきたいと思

います。

「人間（力）教育こそが時代の要請」は桃山学院大学が最も得意とする

課題であると思います。文部科学省の「学士力」や経済産業省の「社会人基礎力」はこの「人間（力）教育」の線に沿って涵養されるべきものであると思います。大学基準協会の『2007年度桃山学院大学認証評価報告書』（2008年3月）では以下の一文が光彩を放っています。

「教養教育に伝統を持つ大学だけに、共通教育科目と専門教育科目の二大区分により編成されたカリキュラムはバランスも良く、教育目標に合致している。」

私達は、松浦学長を始め先輩教職員が築いてこられたこの伝統をより豊かなものへと発展継承してゆかねばならないと決意を新たにいたします。

「私学に徹する」は松浦学長が『大学時報』第325号（2009年3月）に寄稿された「巻頭言」の表題です。「私学危機の時代、やはり私学に徹することである。すなわち建学の精神に戻り、その精神を現代的に具現化することである。ここから私学の個性化が図られるであろう。大学では、ともすれば知識偏重に陥りやすいが、知を生かす豊かな人間性と行動力が大切である。」（一部抜粋）

車の両輪としての知恵と行動、教養と専門という構えを遺産として受け継ぎ、次の50年に向けて出発いたします。

「説明力の欠如」が、残された最大の課題であると痛感します。桃山学院大学の弱点であると同時に私も含めて構成員に共通の弱点かと思われまます。原因はおそらく「勝ちにこだわらない」「おっとり」した性格の反映だと思いますが、大学が、社会的存在である以上、許されないことです。

時には侃々諤々の議論を辞さず、徹底して説明し、理解を求めて合意する姿勢は今は薄れているように思います。元々はそういう気風があった、と先輩諸氏から伺ってはいます。一種の生活習慣病かもしれません。これを克服するチャレンジは自分との闘いです。お互いに励まし合って解決してゆく以外ないと思います。豊かな説明力ある伝統の復活を見守

ってください。

松浦学長を送る門出は，奇しくも私共が次の50年に向けて旅立つ門出でもあります。その意味では，学長が私達の門出を見守って下さる，というのがより相応しい表現かも知れません。

行動する知性の人，松浦教授を育み，学長として選び出した構成員の方々に敬意を表しつつ拙文を閉じさせていただきます。

第一期生として，50年間，御苦勞様でした。そして，ありがとうございました。